

市島春城  
自伝資料

## 『憶起録』 解題・翻刻

金子 宏 二

市島謙吉（号春城、早稲田大学図書館長、理事。1860—1944年）が残した記録は、膨大なものである。その殆んどが現在早稲田大学図書館に「市島春城資料」として所蔵され、早稲田大学史、明治・大正期の政治史資料などとして利用されている。中でも明治二十年代から亡くなるまで書継がれた「日誌」は、市島の伝記資料として第一に挙げられるものである。我々は「春城日誌研究会」として、この内、明治三十五年から大正六年（春城が早稲田大学図書館長在任期間）を翻刻し、「早稲田大学図書館紀要」に掲載させてもらった。<sup>1)</sup>

こゝに紹介する『憶起録』は、誕生から明治十五年頃までの自伝の覚書であり、現在、吉田文庫（新潟市秋葉区大鹿）に架蔵されている春城自筆の資料である。<sup>2)</sup>

表紙 洪引包表紙 四つ目綴 表題「憶起録 来路之記」百八十一×百三十耗 全百一丁

内容 白紙十五丁／「市島三余翁墓誌」二丁／白紙一丁／「来路の記」六十丁／白紙十二丁／「大隈の供奉中政府は」云々 七丁／白紙五丁 となっている。

今回翻刻紹介するのは、「来路の記」六十丁と「大隈の供奉中政府は」の七丁である。翻刻にあたり丁数は、「来路

の記」より起し、「大隈の供奉中政府は」までとし、途中の白紙部分も数えている。

「来路の記」は、『憶起録』につけられた副題であると認められるものである。市島の自伝として、若年のものは『回顧録』（昭和十六年／中央公論社）と『春城八十年の覚書』（昭和三十五年／早稲田大学図書館）がある。

それらと比較してみると、前書では「幼児の田園生活」、「水禍の思ひ出」、「幼時見た前原と奥平」、「英学を学びたる最初の新潟学校」の元々の材料と思われる記述が認められる。後書では、章立てはなされていないものの、幼時の思い出などには、この資料に基づいていると思われるもののイコールというものでもないと考えられる。

この二つの書には殆んど触れられていない重要な記述は、市島の新潟学校への進学から、出京し東京英学校に入校しそこでの努力と、学制が改革された開成学校への進学（東京英学校退学と開成学校入試受験）の秘話である。そして、その後東京大学への進学の彼自身の強い意図と現実の狭間での苦吟、さらに、東京大学在学中の高田早苗、坪内逍遙、山田一郎、岡山兼吉等との交友関係についての記述は前二書と重複するものの、それらの材料になる元々の覚えであることから、飾らない思いが記されている。また、東京大学を退学するに至る実家の家政破綻、父に替って債務の整理を済ましたこと。そして、その後酒色に浸るに到ったことなどにも触れている。それを友人の山田一郎、岡山兼吉の懇な忠告を受けるに至った事が、山田の岡山への書簡を引用するなどして克明に記されていることも、市島の若き日を知る上で貴重な記録である。

この後に、明治十四年の政変（大隈重信が政府から追放される事件）に触れて、小野梓の『若我自当』の冒頭部分を記すが、筆を止めている。この点を市島は後に「自伝資料材料録」で「不完全な自叙伝」と言うのであろう。

又、白紙を挟んで記されている「大隈の供奉中政府は」云々の七丁は、明治十四年に市島が東京大学を中退し、十五年三月に三菱蒸気船会社に就職した経緯を記している。しかし、同社を三ヶ月余で辞職する。その間に感じた三菱の内部について率直な感想を記し、これを辞する経緯について述べている。こゝでは、東京大学を中退するに至った理由を「大隈、小野の帷幕に参して大政党の組織に従事する」と明記されている。それと同時に経済的な面での大学中退と三菱への就職を示す資料も別に存在する。<sup>(4)</sup>

市島のこの覚書を当人が「不完全」と記しているが、それだけに生々しい市島の青春時代の苦悩が赤裸々に綴られていると言える。その意味で、今後の市島研究の重要な資料と位置づけられる。

この貴重な資料を本紀要に載せるに至るには、所有者の吉田文庫・吉田ゆき氏、この資料の存在を教示いただいた旗野博氏、吉田文庫の事務担当の旗野空織氏のご助力があった。これを特記し謝辞を述べたい。

## 注

- (1) 翻刻『春城日誌』(一) 明治三十五年三月—(二七) 大正六年十二月『早稲田大学図書館紀要』第二六号(昭和六十一年三月) —第五七号(平成二十二年三月)
- (2) この資料については、市島自身「自叙伝材料録」(新潟県立図書館所蔵)で「日誌」等と並べて記述している。「憶起録 一名来路の記 不完全な自叙伝」とある。(『春城八十年の覚書』の追補) 同文庫にはこの他市島の父の終焉の記録である『慟哭録』も所蔵されている。
- (3) 新潟学校は当初新潟洋学校として開校され明治六年に新潟学校と改められた。又明治七年に官立新潟英語学校が設立される。市島の記述には、多少の混乱があるが、一々訂正をせず原文のまま記した。
- (4) 「東京大学退学願書」(早稲田大学図書館蔵『愧存経歴文書』)

(かねこ こうじ 元早稲田大学図書館員)

来路の記

春城学人手記

余は寛延元年二月十七日越後蒲原郡西下條の邑に生  
る余は幼き頃父家道未だ衰へず高家を以て郡内を  
重んじんとりちん々第宅を祖先經るものありて  
婢僕共夥多使ひ日々家内を往復するものあり  
木のもき草の刈り草を扱ひて火を熨く心は微  
く悲願不自由と云ふを知らず九歳にして  
父を失ふ今も祖先の遺徳を思ふに祖父を君と  
壯年の頃没せしを余は知らず父を思ふに弱

(表紙)

## 憶起録

来路之記

来路の記

春城学人手記

余は、万延元年二月十七日越後蒲原郡下条の邑に生る。余が幼き頃は、家道未だ衰へず。富豪を以て郡内に重んぜられたり。去れば第宅も祖先経営のまゝにて、婢僕共夥多使ひ、日々家内に出入するもの少なからず。更らに幾んど不自由と云ふもの知らずして育てられたるは、全く祖先の遺沢とや云はん。祖父なる君は、壮年の頃没せられたれば、余は知らず。父なる君は、弱「いぢ」冠にして家を襲れたるが、資性磊落にして、瑣事を意に介せ

市島春城  
自伝資料『憶起録』解題・翻刻

られざる人に在しければ、日々多くの客堂に満ちて、台所は常に杯盤を整ふるに忙はしかりし様覚ゆ。父亦頗る酒を嗜ませられ、或は二外を尽させ給ふ事もありし。尤も身体は頗る強健の方に在りしければ、さのみ健康を害することもありし様なれども、曾祖母は痛くこれを憂へられ、折りに触れては諫め給ふこともありし。曾祖母は常に隠居屋に住はせられ、余を慈しみ給ふこと甚しく、余はわが乳母を促して朝未明より其膝下に到り、戯むれて日を暮すを例にせり。「いぢ 曾祖母は、其頃七十に垂んとする高齢に在したれども身体精神共に健全にて、我家を興し給へたる程の人なれば、群書にも一と通り渉らせられ、男子にも優りて映く、道理を弁へ給ひたれば、一家は勿論、一邑のものも、知るも知らさるゝに論なく、皆な尊敬し奉りたり。実に女丈夫とは斯る人をや云ふならん。此君、歌よむことを嗜ませられ、隠退の後、常々此道にのみ心を専にされたり。歌集は多く散逸したれ」<sup>②</sup>いぢ 一本は蔵して今家に在り。

六才の頃、乳母の手を離れて、書物読むことを習ひ始め

たるが、此頃小学校等の設けもなき際なれば、家君は宮丸と云ふ法印（此法印才学あり。詩を能し磊落にして酒を嗜み、人の葬式に望むて経文の代りに書経を読みたりと云ふ奇談ある人なり）に教育を托され、日々三字経を携へて家より程近き宮に通へたるが、其後又、原玄泰と云へる医師を招て孝経等教はりたることあり。併し此頃余の薰陶に与りて最も力ありし人は、叔父に当らせらる、勇五郎の君にて」(2ウ) 在しなり。此叔父は幼少より読書を好み、和漢の学に通曉して在はしければ、日々机辺に余を座せしめ、懇切に字を教ひ、又、嚴に遊惰を叱し給ひり。余も又、常に叔父の命を奉じて背くことなかりしか、叔父は余かために或は彩色画を作り、或は紙鳶を飛して余を歎ばしめ給へり。此頃、余より二才年少なき弟は、尚ほ乳母の手に在りて、未だ字を習ふには至らざりし。

父なる君は、年少より秋巖を師として、深く書法を講せられたれば、書に於ても一郷誰れも及ぶものなかりし。余も常に手本を父に請ふて、字を書くことを学び」(3オ)

しが、遺伝性の然らしむる所か、年の割合には能く発達し、七歳の頃、細字を写して、人に太く驚かれたることありし。

幾許もなく戊辰の戦争起りて、余か郷里も又、戦地に当たりたれば、弟并に分家の小兒等と共に抱地なる吉田新田に難を避ること、なれり。当時、未だ戦争の恐ろしきを知らず。庭に立て懸けありし大きな紙鳶を置き去りするは、乳母に別る、心地せられ、是非携へ行かんとムツカリ家君に叱られたること今尚微かに耳底に在り。吉田新田は今は西蒲」(3ウ) 原郡七穂村にて、此辺信濃川に沿ふが故に、夏期には動もすれば河水汎濫して堤防を潰決するの虞あり。余が此処に難を避けたる時も、恰かも夏期に際したるが、居ること十数日にして、一夜、老僕栄門が割る、計りの大声もて呼び覺すに驚かされて起き上れば、数多の村人等打集へて庭先きに舟よぐと噪立る有様に、兎心にも唯事ならずと思ひ居る内、栄門は先づ余を背に担ひつ、庭前に出るを見れば、堤防は何時しか決潰しけん。早や庭一面の大水となり居たり。斯



ること此辺には珍らしからぬことなれば、予じめ小舟を簷頭に吊し置き」(4オ) 非常に備ふるが例なり。今しも小舟を庭水に泛べたる際にて、柴門は余を初め他の小供等をも扶け載せて懸かて大門よりこぎ出でたるが、四面暗黒にして唯だ人声のみ水声と相和して物凄きを覚ゆるのみ。目に触るゝものとは、アチラコチラに高張の堤燈を認むるのみ。釋心にて能くも弁へねど、何となく怖氣立て舟中に臥したるまゝ、頭も得擡げざりしが、漸やく天明に至りて四辺を見れば、眼界の及ぶ限りは濁水にて、処々に樹木の水面に崛出せると稍く小高き処にある家の家根をあらはすのみ。兎角する内、遙かに家の」(4ウ) 輾轉して流れ来るあり。鶏の屋根グシに止まりて去るに処なく、空しく悲鳴するあり。筆筒長持等の家具の船近く流れ来るあり。其慘状ナカ／＼筆紙の及ぶ所にあらず。殊に釋心を寒からしめたるは、余か小舟を繋ぎたる大木の枝に幾十の蛇が掛り居り、或は舟中に落ち来らんとする勢これなりし。斯あること凡そ半日計にて、仮小屋を設けたる堤防の上に着きたるが、此間の事は、今記憶

市島春城  
自伝資料『憶起録』解題・翻刻

せず。柴門に問はばやと思ふ内、此ものも過る頃没して、今問ふに由なし。今より思へば、戦争を避けて」(5オ) 却つて戦争にも劣らざる危難に遇へたりき。

此水難に遇へたる後は、直ちに下条に帰りたるが、当時物情騒然として何時戦地とならんも知る可らざる勢なりければ、家君は曾祖母の君と余とを西条村なる母方の家に托し給へぬ。此邑は下条を距ること八里計り山形の方へ引き込みたる処にて、国難を避るには屈竟の処なりし。又、丹呉氏は余が家と重縁の間柄にて、曾祖母の長女に当らせらるゝ余が祖母の君の嫁せられたる処なれば、万事の世話懇切に行き届き宛から家に在るの思をなせり。最初の頃は、庭内の小高き処に設けたる小樓を以つて」(5ウ) 余等の居に充てられたるが、後風害あるに迫りて更らに丹呉氏の分家なる達三子の家を以つて余等の住居と改められたり。此地に居ること凡そ二年計り。曾祖母の慈愛の厚きと丹呉氏の深切なるとは、毫も不自由を感じしめさりしが、此間曾祖母は、余を村の寺子屋上山某と云へる法印に托し給へぬ。此上山某は、僻土には似は

しからぬ能書にて、余は専ら之れに就て書を学びたるが、百人計りの村童の内に余は嫉まるゝまでに上達し、師が褒「<sup>6</sup>オ」給へるも屢々なりし。此交小童の常として、戦争の真似をして遊び戯るゝことも間々ありしが、余は西条方の大将と仰かれ、余より年多き連中を率て、隣村なる本郷村の学童と戦へしこともありしが、或る時、両軍大総寺と云へる寺の後ろに出遇ひたり。余の率ゆる軍勢は先方に比すれば半にも満たず。殊に敵方の大将は、十四、五歳計りのものなりしにぞ。衆寡敵し難きは勿論、大将の組打となりても西条軍の敗たるや明らかなりし故、両軍互ひに逼りたる時は「<sup>6</sup>ウ」味方は大いに怖れたるが、余は小兒なから逃げて臆病と云はれんを西条村の恥辱とし、勢ひに乗する敵方が打てゝと逼り来るを一身に引受けて、散々に打れたることあり。此時恰かも村人の通りかゝるあり。余か難を救ふて労はり家に連れ帰りたるが、曾祖母は常より帰りの遅きを氣遣ひ居給へる折柄なりしにぞ。余も包み兼ねて、ありし事ども告げたるに、曾祖母は太く驚かせられ、深く将来を戒め給へぬ。

寺小屋の師匠は書は優れたれど、深く書を読みたる人にもあらざりければ、築地村「<sup>7</sup>オ」の肥田野竹塙先生が此頃丹呉氏に來り居られたるを幸とし、之れに就て四書の素読を受け、五経の内一、二冊の素読も終りたり。

斯て郷里の方は果して兵乱の衝となり、余か家は幸ひに兵燹を免れたるも、宗家は終に兵火の為め灰燼となり、乱後も兵士官人の入り込むもの少からず。余の家の如きは、官軍数百の常宿となりてサシもに広き家屋も、台所に至るまで兵士を以つて充滿し、幾んど家人の寢食する処さへ無きに至りたれど、家君は強て之れを拒み能はざりしにぞ。郷閭富家の少からざる中に就て、余か家のみ「<sup>7</sup>ウ」自然斯る迷惑を請負ふの間屋となり、大勢の兵士散したる後も、職重き官人等は概ね余か家に來りて寢泊すること、なり、前原一誠の如きも久しく余か隱宅に在りて月日を送れり。

余が家君に呼び戻されて家に帰りたるは、宛かも前原が吾家に宿泊し在りし頃なりし。戦乱は既に鎮定に歸したるも、乱余の物情は旧の如くならず。読書も且らく放擲



し、心の儘に遊び戯れて日を送りしが、前原と云へる人は、小供を愛する人にて、余は小弟と共に時々呼ばれて隱宅に到り、物等貰ひたることもありし。一日裏門を衛らしめ」(8オ)ありたる番人、血色を変へて走り来り、唯今誰れやら色黒く醜き男、ヘコオビに大刀を脇挿み、前原居るかとツト門を排して入り来れり。小人誰何すれども姓名は云ふに及ばずと、早や隱居屋の方へ歩み行けりと報するにぞ。家人は其誰れなるを推し得されば、或は椿事の起らんことを恐れ居たるに、此の黒男は、案内もなく前原の居室へ入り来れり。此時は余は、前原の傍らにありしか、双方別に驚きたる様子もなく、イヤと一ト言云へしのみにて、互ひに礼もせず、何か別らぬ方言もて語り且つ打笑ひたり。後にて聞けば、奥平謙介」(8ウ)の由にて、互ひに相別れてより数年後の会見の由なるに、其の挨拶の無造作なる、年少ながら一驚を喫したり。これより奥平もしばらく前原と余が家に同宿してありしが、余等兄弟は終には両士に慣れて、遊戲に倦みたる頃には交々行きて遊び相手になすに至りたるが、此の

両士の性行は全く反対にて、前原の性質は極めて緩慢疎懶なるに引換へ、奥平は性急激烈の人にて、瑣事に就て一例を云へば、前原は十時頃まで起き上らざる程の朝寝坊なりしに、奥平は天の白まらざる内より早く眼を覺まし、牀上鐘の如き大声にて書を読む癖ありし人なり。此等の」(9オ)事は、余が伝に關係あらざるも当時のさまこれにて一端を窺へ知らる、ま、筆の序に略記しつ。これより後、名和緩と云ふ人、参事として郷里へ来り、旧陣屋を以つて其住所に宛てたるが、此人年輩未だ三十に満さりしも、品行極めて端正に、又頗る学問好の人なりしにぞ。家君は余を此人に托し給へ、日々陣屋に通ふて客ある際は茶の番などし、傍ら五經の素読を受け、半歳余り怠らざりしにぞ。太く愛せられて褒られたることも屢々なりしが、余も其品行の端嚴なるを慕ふて、得難き人材なりと思へたりき」(9ウ)此人、後に森有礼に勧められて米国に遊学したるが、在学中病を得て終に客死せり。此の訃音に接したるは、余が東京英語学校に在りし頃にて、新聞紙其碑文を載せたるを一読し、為めに一

掬の涙を灑ぎたり。此人若し存在せば、必らず人物の内に数へらるべきに惜むべし。

家君の磊落にして、家産を意とせられさると、維新兵乱の前後進むて国家の爲め財産を奉せられたるとに依り、追々家道傾き、余が十一、二歳の頃にやあらん、宗家と協議の上、且らく家を提げて西条に退き、家政を改革」<sup>10</sup>むすることとなり、家屋田地一切を挙げて宗家に托し、僅かに必要の諸道具を携へて余か曾祖母と住み慣れたる丹呉の分家に再び住居すること、なれり。此家は総家内の住居には手狭なりしにぞ、別に曾祖母の居と座敷外一室を増築し給へり。

此頃、余の学業も稍々進み、再び寺子屋に入るべき日にもあらざれば、且らく叔父に就て習学し在しが、遂に家君に請ふて郷里なる星野先生の塾に入ること、なれり。星野先生は、今の大学教授星野博士にて、郡内篤学の子弟は多くこれに入りたるにて、一時は頗る盛大を」<sup>10</sup>う極めたり。余も年少ながら自ら奮発して入学したることなれば、大人にも劣らず勤学し、一年半計りの間に十八

史略、日本外史、左伝、史記、前後漢書等を読み終はり、大人の仲間入りをなして小学の輪講をなすに至り、敢て学問に秀てたりとは云ふにあらざるも、他人に侮らるゝこともなく、詩作などは大人よりも高点を得て、先生は折に触れ命（山陽分家・山由）（余が此塾に在りたる節は、家君は余が身上を此叔父に托し給へり）に褒られたることもありしと云ふ。先生は、嚴肅の人にて、少年に向つて苟くも褒辭を發せらるゝことなかり」<sup>11</sup>オし。去れば叔父の君は、先生の褒め給へるを此上なき榮とし、喜むで余に伝へ励まし給へることも屢々なりし。

余の星野先生に学ぶ二年に満さるも、余に多少漢学の力あるは、先生の薫陶に出たりと云ふも可なり。殊に精神的の薫陶に至りては、此より得たるもの少からず。當時の塾風は、全く漢学風にて先生は質素を旨とし、三飯の如きは、先生、書生と膳を並べて食ひ、敢て其の飲食を異にせず。又、供待の如きも書生輪番に之れを務めて、雇人を用ふるが如きことなく、朝は「<sup>11</sup>ウ白粥を啜りて、夕べは一汁に過ぎず。雪中の如き寒を冒して井水を汲み

台所の用に供しめられんこともあり。多少の辛苦を嘗めたるも書生の境遇にては、此等の事も格別に辛苦とも思はず、学問も目に見へて進歩したれば、ナカ／＼に面白く月日を送りたり。

斯て二年計にして西条へ帰省したるか、家君は如何に思へ給ひけん、最早水原の塾に行くには及ばずとて許し給はざるにぞ。余は痛く失望したるが、築地なる肥田野先生に就て学ぶことを許し給へしにより、余を拒まず(ママ)これより後は日々」<sup>(12オ)</sup>一里余りの処を往復し、大雪の候を除ては惰りなく築地まで通学し、家に在りては叔父の君に就て詩の添削を請ひ文義を質することを務めたり。當時、余は白文の資治通鑑を課とし、傍ら劉向新序の輪講をなしたるが、肥田野先生は、極めて磊落の人にて多くの門弟を置くことを欲し給はさりしにぞ。日々先生の教を受けるものとは、余の外に先生の子息、新発田のもの二人にて、先生の子息は未だ初学なりしも、他の二人は年輩も余に比すれば六、七歳多く学問も極めて進み居たれば、余は此二人に字義等を問」<sup>(12ウ)</sup>ふて、益する所

も少からさりし。併し試作は年少無邪気の故ならんが、常に先生に賞せられて、余か敢て当らざる賛許、先生の告るのまゝ載せて、詩稿の首端に在り。今尚は家に蔵す。先生は酒を嗜み、磊落にして偏幅を修めず。書生の間入をして、鬼ごなどなして遊び戯るゝ人なりしも、家に在りては、謹慎にして父竹村君に仕ふること忠孝に、余が通学せる頃は、先生の父はチウキ(中氣)に罹り半身不随なりしが、先生は講釈半はに父翁を背に担ふて講席を」<sup>(13オ)</sup>過ぎて厠に伴はるゝこと常なりしが、磊落の先生に此事ありしは、深く感服したる事どもなりし。

斯て、月日を送る内時勢はいつしか変動して、英学漸やく流行し、新潟にても新潟英学校を設けて、県下富豪の子弟は県令の勧誘によりて大抵入学することゝなれり。家君は、元來進歩主義の人にては、好むで洋書の訳本等を読ませられたれば、此学校の設立を聞て大いに喜び給ひ、折に触れては入学を勧め給ふこともありしか、余は漸やく漢学の大体に通じたるのみにて、未其境にも入らざる際なり」<sup>(13ウ)</sup>しにより、中途に之を廢するを本

意なく思ひ、敢て父命に従はざりしが、兎角する内宗家の子弟も入学することに決したるにぞ。家君は余等兄弟にも、是非入学せよとの催促ありて、今度は強て拒み兼ね、一日計思案の上、愈々入学することに決したり。これ明治四年十一月の交なりしと覚ゆ。余時に歳十二。此

歳も端なく暮たれば愈々翌年の春、弟と共に新潟へ出て松木久作と云ふ商家（此商人は家君の庇蔭によりて門戸を張るに至りたるものなり）に寝食して日々学校へ通学すること、せり。当時学校も創設後未だ日月を経ざるにより百<sup>（14）</sup>事不整頓にて、今より考ふれば可笑しき事も少なからざりし。時の教官は、仙台の人にて首藤陸三と云ひ（此人、後に改進黨に入りて大いに尽力し、余が北越に在りて、此党の為め全力を致すの頃は、氏、仙台に在りて、遙かに余の著書を読むて激賞措かざりし由なるが、其際は未だ余が先年氏の門下生の一人たりしを知らず。後、東京の或る集會に兩人邂逅の折話次、此事に迫むて首藤氏は大いに驚き互ひに一笑したることあり）、そが下に五、六の助手ありて、初学の輩を教授せり。

教官は、助手並びに生徒中学業優等のものを教ゆるに止まりしか、<sup>（14）</sup>最高等の読本はグードリツチの英国史位なりしと記憶せり。又、以つて学科の程度如何を推知し得べきなり。

余は弟と共にスペルリングを携へて日々校堂に上りたるも、最初の頃は意味もなき誦読をなして蛙鳴蟬噪に日を送るを甚だ面白からず思へし。去れど辛苦三、四ヶ月にして漸やく読本に移るを得たれば、稍々勉勵の志も起り、第一リードルの半を讀通して、後は吾れ乍ら驚くべき進歩をなし、余より五、六才も年長なる年輩も忽ち追ひ捲られ、一、二級計り一時に飛越して昇級し<sup>（15）</sup>たることもありし。今より考ふれば余が漢学の力は大いに之れが進歩を助けたらと思はる。

月日を経るに従ひ、校運も稍々隆盛に赴き、外国教師も來り寄宿舎の營繕も出来たれば、余等も又、寄宿舎に入りしが、石沢兵庫、立花安次郎等の年長は、余等を憐れむて常に懇切の世話をなし、為めに學業の進歩を促したるも鮮からざりし。余は深く此等の人々に厚意を謝せさ

るを得ざるなり。」(15ウ)

入校以後、二年計りにして漸やく万国史、米国史、窮理書等の平易なるを読み得るまでに至りたるが、これより先き首藤氏去りて、梅浦精一氏等訳官を以つて県庁に奉仕する傍、学校に來りて教授に當り、時々西洋新聞を切抜き之れを助教に翻訳せしめ、自ら校正して新潟新聞に掲載せしめたるが、数百の生徒中、余一人は殊に拔擢せられて助教と共に翻訳を試むること、なれり。これは當時に於て生徒の極めて榮譽とする所にて、殊に年少なる余か拔擢」(16オ)せられたると見て、中には不思議の念をなしたるもありし。なれども、余の得意とする所は、寧ろ漢文字に在りしが故に、数十行の英文を苦もなく反訳し、梅浦氏も能く出来たりと屢々賞せられたり。

此時分外国教師は、課題を設て英文の書翰を書かしめ、文字を書くことも至りて厳しかりしが、余は巧みに教師の書風を学び、兼て手翰文を作るには非常に勉強したれば、終には生徒第一と呼はる、までに進み、何時も高点を得たり。又、輪講にはパーカルの窮理書を用ひたるが、

これにも」(16ウ)常に高点を得て翌年の大試験には、正則、訳読、数学(當時は学校の科目を別つて此三科とせり)共に最高点を占め、多くの褒賞を得て県治報知の筆頭第一に掲示せらるゝに至れり。

此試験によりて正則は最高級に進み、算術は開平開立を習ふに至り、訳読は最高等に進むを得ざりしも、一級を飛越て異数の昇級をなしたるにより、先きに入学の節、a、b、cの教授を受けたる助教と級を同ふし、肩を接して輪講するまでに至れり。此際新潟に英語学」(17オ)校の設立あり。此校は官設にて校規課程も英学校に比すれば整頓し居りたるを以つて英学校より転学したるものもありし。又、余にも転学を勧めたるものありしかど、余はこれより先き東京に遊学するの志を抱きたるを以つて其勧誘に随はず、此年冬期の休暇には家に歸りて、切に上京を家君に請へり。家君も余が新潟英学校に於ける成績を嘉みせられ、翌年の夏に迫むて上京を許し給へぬ。これ明治八年、余か十六歳の時にして、恰かも丹呉の老人が日光を経て東京に行かんと思立たれた」(17ウ)る折

なりしにぞ。之れを機とし家君は老人に余を托し給へ、こゝに初めて路を会津に取り、旅といふものを試みたり。当時道路極めて不便にて人力車の如き便利なる乗物もなく、日々十里計りの山道を丁寧歩き、或時は牛馬に乗り或る時は秣籃に乗りて行人に笑はれ、九日計にして東京に着し、馬喰町なる一旅宿に投じて数日の間は老人と共に江戸見物をなしぬ。

当時、余が親戚なる熊倉美雅君、工部省に出仕して番町に在り。そが長男興作と云へるは、工学寮に、次男恭三は、東京英語学校に何れ<sup>(18才)</sup>も入学して、勤学中なりしにぞ。家君は、余が在京中教育一切の事、熊倉君に托し給へぬ。去れば、余も丹呉老人の帰国と共に番町へ移り、間もなく東京英学校へ入ることを得たり。此学校は、当時一ツ橋門外旧榊原邸に在りて、当時生徒は一千人に満ち、頗る盛大の模様なりし。余か入りたる級は、今は忘れたるが科目は格別六ヶしとも思はざりし。唯だ主任教師は、書取りに重きを置く人にて、其音声の聞き慣れざる内は大いに苦しめり。又、二、三ヶ月を経て、

他の教師に就きたるが、これは又、文法に重<sup>(18ウ)</sup>きを置く人にて、正則に文法を研究するは、これを以つて初めとなせば、これにも又太く苦しむたり。概するに、此校に入りたる当初は、授業等の田舎学校と大いに同じからざると。其主とする所の甚だ径庭あるとにより、科目の易き割合には、多くの心労を要し到底田舎教育の用に立たざることを覚悟せしめたり。

然れども新渇に於ける教育は、固より無益にあらざりし。漸やく此校の授業法に慣れては学業の進歩<sup>(19才)</sup>も追々速力を早め、入校一年計りの後より開成学校に入るまでは何時も首席若しくは次席を占むるに至れり。斯くて一年半許番町より日々通学して、終に寄宿舎に入りたるが、此間は病氣其他の事故により殆んど一日と雖とも欠席したることなく、炎暑の候九段下を上下するは、随分の難儀なれども嘗て一回車に乗りたることなく、書籍筆墨の如き已み難き必要物を購う場合にあらざれば、一銭の小遣錢も熊倉氏に請ひたることなく、熊倉氏は当時節儉にして幾んど周歲一汁一菜の態なりしも、嘗て之れを意に



介したることなく、又」(19ウ) 同氏の儿女は甚だ数多く、余が勉強する傍ら泣き叫んで、妨をなすことも折々なりしが、之れすら嘗て厭ふことなりしは、吾れ乍ら感心にて、其後寄宿舎に入りても、専ら謹慎して学問に余念なかりしかば、熊倉君も余の行状に感服せりとて、後には小遣錢を求めざるに、却つて必要なきやと折々問へ尋ねられ、強て贈り届られたることもありし。又、熊倉の細君は、隋分口やカマシき人にて、同家に寄食せる居候共がこれまで居耐へず色々苦情を生じたることもありしに、此人すら余を愛して数」(20オ) 年の後に至るも変ることなかりし。実に余がこれまでの経歴を考ふるに此頃兩三年間程謹慎なりしはあらず。余は実は此頃を以つて初めて居候の境界を味はへ、随分甘からず感じたれど、幸ひに能く耐へたれば、先々何れへ行くも落第せぬ方ならん歟呵々。

熊倉興作子は、好むで小説を読む人にて、冬夏休暇の折等には夥多の貸本を集め、之れを読むで日を送るを例としたり。余も何時しか此癖に化せられ、終には非常に之

れを嗜み、或る休暇中の如き之れに耽りて、毎夜二時頃まで寝ざりしことありき。これに」(20ウ) より八丈伝の如きは二度までも繰返し修め、馬琴の著書も一応は目を暴したり。此事、余の精神上果たして如何なる影響を生じたるや。余自らも知らされと、これより先き余が

郷関を出で、京地に遊学する際の志は、開成学校に入りて舍密学を修めんとするに在りしか、後に至りて之れを変し、終に文学を修むること、なるは、一、二理由なきにあらざれど或は小説に耽りたるが如き冥々の裡に余を導びきたるをあらざる歟。」(21オ) 寄宿舎に入りてよりは、別に記すべき程の事もなければ、想ひ出るまゝ、一、二の雑事を書き立れば、大島正健と云ふもの学才ありて、殊に親密の交はりありし。此頃北海道に農学校設立せられて、五、七の優等生は之れに転学すること、なり、大島も行くことに決心したる際は、余も一時心を動し同行せばやと思ひたれど、後又、思案して終に断念せり。又、将来余の親友中に数ふる高田、天野等は余より一等上級にて、伊藤悌次、穂積八束、近藤仙太郎等数氏は恰かも

同級にて、近藤氏は最も学才ありて」(21ウ) 余に取りては最も悔る可らざる競争の対敵なりし。

明治十年、高田、天野等、余より一等上級の生徒は、上級六級と云ふに進み、余は下等一級に進みたるが、凡そ開成学校に入るには、各府県の英語学校共に上等六級生を試験の上入学せしむるか例なりしにぞ。高田等は成規に基いて試験を受けること、なりたるも、余等は試験を受けるの資格を存せず。若し強て之れを受けんとせば、退学の上之れを試むるの一途あるのみ。然れども当時の実際英語学校よりすれば入り易く校外よ」(22オ) りすれば入り難き情実ありたるにぞ。余か同級の優等生、多少学力に自信もあり、試験に臨み度念は焼くが如くなるも、一旦退学して万一試験に落第せば、所謂のアブ蜂取らずの譏を免れ難きにより、誰れも意を決して退学の危道を踏むものは無しし。

余は心竊かに決心する所ありたれど、容易に之れを口に発せず。試験の前日に至り初めて之れを熊倉君に告げたるに、君は大いに余の決心を賛成し、成敗を度外に措て

試むべしと慫」(22ウ) 慫されたり。余は於は一層決心を固ふせるも奈何せん試験は明朝に逼りて、余は未だ英語学校の名籍に在り。退学の手続を運び履歷書等を差出すまでには、少なくとも一兩日を要するに、最早一夜に迫りて其暇なきは、頗る余が頭痛を苦しめたる難問なりしか、熊倉君は試みに校長に商議すべしとて出で行かれたるが、余は熊倉氏の家に在りて待つこと凡そ六、七ケ間、夜の十時頃に至り漸やく帰られ、聞けば万事差間なし、校長は当方の熱心に服して即座退校を許し、同時に履歷書」(23オ) を開成学校に送り呉れたれば、明朝は直ちに試験に臨むべしと退校の許可書を示さる。余の喜知るべきなり。

余は、大いに喜びたると同時に、又多少の憂なきにあらざりし。そは万一落第するときは、熊倉君に対して面目を失するのみならず、同窓の諸君にも嘲り笑れんを思ひたればなり。然れども彼是れ案じわづらふ暇もなく夜は明けて、早や試験場に臨むの時刻となりたれば、ロク／＼朝飯も喫せず、急き定めの外に至りぬ。試験は三ヶ

間打続きたるが、問題も案外容易」(23ウ)なりしにぞ。稍々安心せしも、実はその結果を聞くまでは中心大いに氣遣ひなりし。総じて此期に試験に試験を受けたるもの三百人計りもありしならんが、内七十人計りは、余を初め英語学校外のものにて、他は皆な各府県の英語学校を卒業して来れるものなりし。試験後五、七日を経て初めて結果を聞くを得、校外受験者の内、余並びに工学寮より来れる横田某の兩人のみ及第し、他の六十余人は皆な落第し、各府県の英語学校より来れるもの、内にも或は落第し、或は仮入学を許されたるものもありし。去れ」

(24オ) ば余等兩人は殊に目立つて見へ、熊倉君も非常に満足されたり。

而るに英語学校に於ける余か同級生は、余の登第せるを聞て無念にや思ひけん。校長の処置、私ありとて痛く激昂し、校長に詰問せん等嘩き立ちたるよし。如何にも退学を願出たる即夜之れを許可したるは、先例の無きことならんも、固より校規に触れたる処置と云ふ可らず、必竟余の志を嘉みして便利を与へたるまでの事なり。若し

他の同級生も余と同じく退学するまでに決心せば、」(24ウ) 校長争で同様の便利を与へさらんや。去るを自ら其決心もなさず、他人の好結果を得たるを見て校長の処置を云々するが如きは、陋も又甚しと云ふ可し。

余は、図らずも幸を得て一年の学期を短ふするを得たり。然れども余が学力、開成学校に入るには未だ足らざる所あり。殊に数学の如きは、遥かに後れ居たれば、夏期休業の間、興作子が数学に長するを幸ひとし、六十日の間は専ら之れを研鑽して新課業に応ずるの準備をなせり。」

(25オ)

暑中休暇も終りぬ。開成学校にては寄宿舎の経営全からざるため、且らく生徒に通学を命せり。余はまた熊倉君に請ふて其家に寄宿し、日々通学すること、なれり。予て若干の準備をなし置ながらも一級高き学科を終りたる学生と課業を同ふることなれば、流石に力に余り十幾科ある課目の下調べをなすには、朝は東方の白まざる内より登校の刻まで、学校より帰りては夜の二時過る頃まで絶へず勉強したるも、尚ほ慊らず思へたる程なり。総

して三ヶ月間計は非常の勤勉を以つて漸やく」(25ウ) 他の学生と互ひに馳騁するまでに至りぬ。此間の勤勉は、余の一生涯に於て比類なきことにて、睡中幾回か幾何学の誦誦などして、熊倉氏に笑はれたることもありし。

余が輒々課業に熟したる頃は寄宿舎の経営も成り、新入学生は皆な入舎すること、なりたるが、爰に一事の記し置くべきは、開成学校のこれより先き給費の制を設け、生徒に若干の学費を支給する一事これなる。これは開成所創設の当時、官費生を置きたる遺制にして、其趣旨は主ら無資力の学生を補助するに」(26オ) 在りしなれども、既に此制を設る以上は、窮困を名として皆な給費を受けんとするは勢避く可らざる所にして、新入学生も幾んど五、七を除くの外は皆な給費生となり、余の如き当時学費に窮するまでに家道墜ざりしかど、給費生となれば種々の便利もあり。且両親の手元を聊か省く事ともなれば、旁々此特典を蒙ること、なれり。これ実に此校が給費を許したる最後にして、入舎と同時に机椅子夜具蚊帳等の類一通りを銘々に支給したり。実に当時は此学校の

生徒を待つこと優渥の事なりし。」(26ウ)

余と寄宿舎に窓を同ふして読み寝台を並べて打語りたる儔侶は、都合八人計りにて、今尚ほ其姓名を記憶せるは、岡山兼吉、三崎亀之助、山田一郎、藤田四郎、田原榮、中原貞三郎等にて、就中親しかりしは、岡山、中原、山田の三名にして、此際の親交は実に将来骨肉啻ならざる關係を生ずるの発端なりける。此外他の房に在るものにて親しかりしは高田早苗、坪内雄藏等二、三人ありしも、深く交るに至りたるは較々程立ちたる後の事に属す。」

(27オ)

当時日曜毎に郊外に散策するを常とせしが、主動者は大概岡山にして、儔侶は余及び中原なりし。此三人の志す所の専門は、未だ確かに定まり居らざりしも、岡山は政治、中原は法律、余は化学と各々其欲する所を異にした。然るに此三人共不思議にも将来他の専門学を修むること、なりたるが、当時予科を修むる際なりしにぞ、散策の際には、各々雑駁なる問題を提出し、学生の常として時弊を哲学風に論じたること最も多かりし。岡山は此

時分より多少議論に見識ありしも、弁は訥にして随分開き取れ難き所もありしが、剛愎にて、仮りにも負」<sup>(27ウ)</sup>ることを好まず。意見の通徹するまでは、一時間も二時間も続け様に論ずる性質なりし。又、中原は弁舌爽かにして磊落の語を吐き、他を罵倒し去るの長所を有し、余は弁も訥、議論の考案も兩人に及ばざりしかど、公明正大を議論の経緯とし信する所にして天地に愧されば、議論は拙なるも顧みずと何時も主張せり。当時此等の空論を為しつ一ツ橋門外より向島のハヅレ、王子、或は日暮<sup>(ママ)</sup>辺まで空もなく往来して其日を暮すを樂とせしが、途中余りに議論に実か入りて、行人に挨拶せらるゝも露知らで通り過ぎたることなどあり」<sup>(28オ)</sup>て、後に其人に笑はれたることもありし。当時書生の風も極めて質素にて、斯る郊外散策に車に乗りたること等極めて少なし。又、往復四、五里に渉る場合には、途中空腹を感じることもありしが、大概是囊中四、五銭の資本にて焼芋を購ひこれにて空腹を補ひ、稍々贅沢の時は牛肉屋に立入る位のことなりし。又、甚しきに至りては、橋銭渡銭にすら事欠

くこともありしが、此等は毫も意に介する所なかりしは、今の書生と月鼈の相違ありと云ふて可なり。学校には先輩生徒の設立せる茶話会なるものありて、一週間一回、書生打寄り思々の題」<sup>(28ウ)</sup>を擇むて学術上の講談をなし、或は宿題を設けて討論等を為したるが、余等も之れを傍聴して頗る愉快に感じ、争で我々もこれに倣ふて、一会を開かんと同年生の斯る事を好む向きに協議し、何れも賛成を表したるにぞ、遂に共話会と云ふを設けたり。今こそは弁論の術も開け青書生も能く演説をなせど、此頃には演説は大学生にも甚た難き事にて、各々会員に向つて講談となすまでには議論を一通り文章に認め、之れを机上に置き之れに依頼して漸く十分若くは二十分位の演説をなす程なりし。余の如き生来弁論に嫻は」<sup>(29オ)</sup>ず、聴衆を前に控て舌を鼓するが如き最も困難とする所なりしにぞ。初めの頃は、十行二十字二枚計りの新聞演説様のものを認め、之れを会に演説する前には予じめ人無き講堂に入りて幾回となく稽古をなし、漸やく熟するに迫むて、会員の前に赤面することなく演

べ尽すを得たる位なりし。而して演説に熟すと云ふも幾んど文章を談論する様のことにて、聴者に感動を与ふる為め辭に掛引をなすが如きは、未だ企て及ふ所にあらざりし。然れとも余は屈せず、幾んど課業の如くに此会に講談するの材料等を取調べ大概会」(29ウ) 毎に何か演説をなしたるにぞ。自然会員よりも重んぜらるゝこと、なり、幹事には大抵選挙せられ、嘗つて神田孝平、津田仙等一、二の人を招て講談を求めたる節も、余は其委員に撰はれ学校中の数会か聯合して各会より一名の演説者を出し共同演説をなすことを企てたるときも、余は第一に演説者と定められて戦論と云ふを演説したることあり。又、共話会も最初は兎戯に類するものなりしも、追々は発達して戊寅の歳に至り会員中の一派は叛て別に戊寅社と云ふを組織するに至り、共話会と両々対峙して互ひに競争することとなり、此戊寅社を組織せる」(30オ) 連中は三崎、有賀、渡辺、安積等二十名計りにて、学問の成績は何れもよろしき方なり。此分離も三崎、有賀等が自惚心より出でたるにて、余も三崎より屢々分離派に賛成

せよと勧誘されたるも、斯る不義の企には応じ難しと断然拒絶し、岡山、中原及び田中館愛橘等共話会の熱心家と共に向島に会し、飽まで共話会を維持せんと誓ひたることありき。今にして思へば、此二個の協会は改進黨并に政府党を生ずるの發端と云ふも過言にあらざるに似たり」(30ウ) 何となれば、共話会派の学生は、卒業後多く独立して野にソレ／＼業を求め、或は岡山及び余の如きは遂に小野梓氏に勧めて改進黨を創立するまでに至りたれど、戊寅社の連中は、卒業後多く政府に入り、或は日報社に關係を結び、帝政党の爪牙となりたる人も少なからざりし。去れば双方の同一会内に両立する能はざりしは、必竟其志操並びに氣質の相違之れを然らしめたるにて、早々他日別種の方嚮により世に立つことを予言せるものと云ふて可なり。

戊寅社の牛耳を取るものは多く大阪英語学校出」(31オ) 身にて学才もあり。又、課業にも甚た勤勉なりしにぞ。各級共に首席は概ね此連中の占むる所なりしが、其氣風に至りては、大いに磊落を欠き常に瑣事にのみ齷齪して、



他人の短所を挙げて之れを評論する等のイヤミあり。其氣質に於て余の如きとは全く相容れず。去れば両派は折りに触れて相軋ることもありしか、今より思へば兎戯に斉しきことの多かりし。當時の状態を知るの一端ともなるべく思ふれば、爰に一、二の事実を挙げんに、曾て風俗問題に付て一場の波瀾を生じたることありしが、其原因を繹めれば、共話」(31ウ) 会派の某々が門限を外して、或は酒樓に芸妓等を弄ふは書生にあるまじき事なりと戊寅社派より痛く攻撃したるより起り、色々争ふ内に議論は結局枝葉に涉り料理屋に酒を呑むは、風俗壊乱にして、蕎麦屋、牛肉屋に酒を飲むは風俗壊乱にあらずとの奇論も生じ、戊寅社員の中、後には政府に可なりの位地を有する輩の如き者は真顔にこれを主張し、余等をして一笑を催さしめたることありし。これ固より一場の笑話に過ぎずと云へとも、戊寅社組が如何なる規模の人物なりしか其一端を窺ふには難からざるべき歟。」(32オ)

余は優福の家に生れたれば、金錢に就ては書生中にも極めて淡泊にて、他人貨せと云へば有る時は貨もし、酒等

飲むときも自ら弁じて毫も之れを意とせざりし。斯る場合に金錢を持ちながら惜むて之れを出さゝる歟、若しくは之れを出す代りに他日他の報を待つが如きは、余の最も擯斥する所なりし。又、漢学の薰陶により自ら磊落の性を養成したるにより、細節に拘はりて大局を顧みざるが如きも、極めて快しとせざる所なりし。去れば一派が瑣事を是非するを聞て心窃かに失笑し、此般の小器果して何事をかなし得んと、」(32ウ) 故らに友人を誘ふて酒樓に豪興(書生としては豪興なりとの意)を試み、小心唯だ校規に触れんことを恐るゝ僻輩の胆を奪ふことも屢々なりし。然れともすべて此等の遊興は、洒々落々にして今頃の書生が外嚴肅を粧ふて内密娼樓に出入するの類にあらず。余は、幼少より父の遺伝によりてか、酒を嗜めるにぞ歡樂とする所も又主ら酒に在りて、或は一升を尽すも乱れず。翌日の下読をなすには差支なかりしなり。斯る洒々落々の挙動は、自ら同舍者の慕ふ所となり、後年余が最も尊敬する所の親友山田一郎の如き此時分は余と余りに交も深」(33オ) からず。一郎が時に瑣事に齷齪

たるを見て、余も交るに足らずと窓を同ふ者ながら疎遠に打過しが、或る夜一郎は一書を認めて、余が枕辺に投し去りぬ。燈を挑むで読むに、彼れか身事を告るの文にて、要は余に交を請ふの意にてありし。余は、今尚此書を存し、春城雜集の内にあり。又、岡山の如き余に長すること五、六歳、且極めて嚴肅の性にて後年余に箴戒を与え、実に余が兄と仰き畏友とする所なるが、此節は余の洒落の逸興を咎めず、時には余に誘はれて酒樓に遊ぶこともありし。或る夕、天神の某樓に登り余は痛く」<sup>33</sup>ウ酔ふて帰るを忘れ、終に岡山と共に此樓に臥したることあり。恰かも夏の節にて蚊帳も釣らざる所に臥したるま、岡山は大いに苦しみ、今日に至るも折りに触れては此事を語り出で、余に向つてヒドイ男だナドコボス事もあり。又、此時分高田早苗と意氣投合するに至りたるも此洒落の氣象、実に然らしめたるなり。概するに女色を離れずしては、真に洒落の挙動起る能はざるものなり。余は、此頃年齒漸く進むて二十歳に垂んとせるも、曾て女色に身体を漬したることなく、又実にこれを口にする

をも潔からず思へたりし。これに就て一笑話あり。余に文」<sup>(34オ)</sup>科大学に入りて、高田、坪内等と机を接して学問する頃、一夕坪内及他の一友と共に上野辺の旗亭に妓を招て夜深るまで対酌することありしが、興に乘して帰るを忘れ夜の既に二時を過ぎたる頃、樓婦の一宿せよと云ふをも聞かず、強て帰らんと門外に出で初めて時計を検し、夜のいたく更けたるを知り、宿るべき所なきま、再びび門を叩て一宿を求めんとせるも、門より家まで遠さかりて終に聞こえず。已むを得ず他に宿泊の処やあると相談する内、其一友は固と娼樓などへ往來する男なりければ、吾れに知る所ありばイザ行かんと云ふに任せ、北里とは心附」<sup>(34ウ)</sup>かす、上野の山下を右に行く数丁にして初めて心付き、遽かに某に向ひ何れに行くやと問ふに、某も余が平生の氣質を知るものから、初の頃は明かにも云はさりしか、屢々問れて某も語窮し北里へ行くなりと答へたり。余は、之を聞て不快に耐へず、北里ならば行くまじと云ふに、某は余をいろ／＼に言ひなだめ「君の潔癖は余も知る所なり、さりながら茶屋に泊

まること、せば、敢て潔白を害すまじ」等云へど、余は心誓ふ所ありとて固く辞して応ぜず。終には、兩人を振り棄て、去らんとせしが、心又窃かに思へらく、余若し」<sup>(35)</sup> 応ぜずんば尚兩人も行かざるべし。左ありせば兩人に氣の毒なりと打案じつ四辺を見れば、四、五間計後方に車夫も螢計りの灯火を認めたり。近寄りて見れば幸ひ二人乗りなりければ、車夫に此兩人を乗せて遊里へ行けと命じつ、強て二人を乗せたる後、余は直ちに後へに引返したるが時は早や二時半頃にやあらん。夏の夜ながら漸やく冷気衣に透り四面寂寥として犬の遠吠すら聞こえず。流石に物凄しく覺へたるか、凡そ二町余り行きたらんと覺しき頃、後より余の名を呼んで走せ来るものあり。近いて見れば坪内」<sup>(35ウ)</sup> にて、其云ふ所を聞けば某を漸やくの事説勸めて、独り北里へ遣りたりとの事なり。余は寂寥を感じる折柄、図らずも伴侶を得たれば初めて心強く思へ、坪内に縋りてゆく。今より天明までは、尚ほ三時間もあるべし。アチラコチラそ、ろあるきする内には、天も白むべし事。これより万世橋に出でそれよ

り銀座通りを経て新橋に至らんと足に任せて四方山の事、高声に打語らひつ京橋辺に至る頃は、稍々疲を覺へたれど憩ふべき所も鍋焼、饅頭を食ふ錢すらなし。疲勞を忍むで新橋に至り、更らに引返して九段に近く頃、余は思へらく、招魂者」<sup>(36)</sup> 社内には腰掛の椅子あり。急き行きて彼れに憩は、やと勇を鼓して九段坂を上り尽し、更らに又思へらく社内に入るには交番所あり。此深更社内に入らば彼は嫌疑を受けんも知る可からず。若かず競馬場内の芝草を蒲団として一睡せんにはと議こゝに決し、石燈籠に身を寄せて天明まで駒鈴雷の如く一睡し、早朝旅人宿を求めて眠を補ひたるは、随分書生には有りかちの事ながら、今にして思へば、余も当時はナカ／＼の剛情張なりし。此般の瑣談事、委しく書綴るの要なきが如くなれど、斯る氣質は」<sup>(36ウ)</sup> 後年反動を起すの原因となり。為めに余が氣質に多少の変化を生ずること、なれる故、後の照応として斯くは物しつ。

これより先き、文部省学制を改め、開成学校を帝国大学と改称しつ。法理文三科を設け、別に予備門を置き、予

備門を卒ゆるものは三科の内一の専門科を選んで入ること、はなれり、余は、前にも述べたりし如く初め郷里を出る頃には化学を修むるの志なりしも、固より深く思ふ所ありて志したるにあらず。小供心に化学」<sup>(37)</sup> 試験を面白く覚へ、軽率志をこれに定たる位に過ぎざれば、予科幾十種の学科を研究する内に、自ら志の動きたるも敢て異むに足らず。然れども余をして終に文科（政治経済）を専門とするに至らしめたるは、家庭の教育と友人の薰陶与りて大いに力ありしに似たり。余は、固と貨殖の家に生れ、殊に維新革命の際、余が郷里は政治の中心に当りたれば、幼少の頃より耳に入るは、乃祖貨殖の履歴、若くは革命の政治談等にして、漢学教育傍ら理解力を与へ、知らず識らず余の脳裡に政治」<sup>(37ウ)</sup> の思想を注入したりと見へたり。又、校内に於ける友人の内、前にて述べたりし岡山等は、多く政治に志を抱きたりしにより、日々の談論の如きは、一層余が頭腦を刺撃したるを覚ゆ。去れば余か文科を修むることに決したるとき、二、三友人も余が氣質に相違せる専門なりと評せり。

文科に入りてよりは、同科同級のものと共にすること、なりしか、同級生は高田早苗、坪内雄三、山田一郎、天野為之、有賀長雄、福井彦次郎、真崎孝人及余の八名にて、執中高田、山田、坪内とは最も親しく、高田、坪内とは」<sup>(38)</sup> 時々相携て酒樓に飲み、文学論等をなすを上なき樂となし、山田とは相携て余が郷里に帰省し、帰省中は余が親族にも引合せたることもあり。山田は学才ありしかと、貧窮の家に生れたれば、動もすれば余が性質と相反する動止ありしも、打連れて帰省し、アチラコチラに磊落の豪遊をなす内、渠れも自然に余か粗豪の風に化せられたるか、將た強盛なる渠れの自克心は強て自らを矯めたるか、僅々三十日計の同遊は渠れの氣質に非常の変化を与へたるもの、如く、帰京の後は幾んど別人の如くなれ」<sup>(38ウ)</sup>。要するに渠れの氣質を変化するには、余も大いに与りて力ありと信ず。（これと同様に余は智識に於て彼れより得る所又実に尠しとせず）有賀の如きは、学問は頗る秀てたれど、其氣質の如きは実に氷炭相容れざるものありて、同室に起臥しなからも幾んど親

密なる談話などなしたることもなかりし。これに反し岡山は法科に在りて室も異なりしかど、旧の如く親密に交はり、郊外に散策する折などには、必らず打つれ立ちて互ひに時勢を談じ、此頃より岡山は余に向つて熱心に社会の實際に通せざる可らず」(39オ)と論じ、何時も余をして傾聴せしめたり。蓋し岡山は年齒、余に長じ社会の實際に通じたるのみならず、年少より種々の苦辛を嘗め来り、当時書生中なれど世味には大いに通じ居たればなり。或る暑中休散に、岡山は切りに旅行の必要を説き、社会の實際を見んとすれば旅行に如くなしと論するに、余も同意を表し、遂に打連れて四十日余の漫遊を試むること、なれり。初の経画は、東海道を経て京都に至り、それより九州、四国をも渉らん心算なりしが、此年屈烈刺病」(39ウ)所在猖獗を極め、予防法実施の結果として、交通甚た不便にして、終に名古屋より以西へ行く能はず。道を転して中山道に入り十数日山路を跋涉して甲州街道より帰京したる。詳細の紀行は余の雑著の内に在れば、こゝにクダ／＼しく載するを要せず。唯た、此の旅行に

市島春城  
自伝資料『憶起録』解題・翻刻

よりて幾千の利益を得たるやと云ふに、今にして考ふれば実に莫大なりと云ふて可なり。一、二を挙げれば、余はこれによりて初めて健足なるを認たり。これによりて旅行の味はへを知れり。これによりて事物を観察するの法を知れり。これによりて幾」(40オ)分か社会の實際を知れり。蓋し此行極めて儉約を旨とし、人車の如き可成用へざるを約したれば、大概是歩行にて名所旧跡の如き傍徑に入る所をも漏さず訪問し、事物に接しては古事附ながら彼是の理屈を付け、一々丁寧に手帳へ書き留めたれば、此行程経過地を将来まで能く記憶する事はあらじ。而して艱難に打勝ことも事物に古事付解釈を附すること、岡山は尤も長し居たれば、此行の利益は実に岡山の賜として、深く謝せざるを得ざるなり。

余か文科二年級に入りたる年は、余の爲」(40ウ)めには極めて不幸なる年にてありし。前にも記したる如く余の家は、家政改革のため下条より西条へ移り四、五年の間此地に日月を送りしか、家君はいろいろ考案の末、岩船郡辰田新村に多く所有地あるを幸とし、こゝに新居を営

み、終に家を移し給へぬ。これよりは養蚕等を試み、生計の助けとなさんと力め給へるも、家道は追々傾き、百事為すこと意の如くならず。剩さへ水害を被りて若干の土地を失ひ、負債も年を遂ふて増加し来りたるにぞ。余も打棄置難く、当時は熱心に経済学を講じ、一方にはこれ<sup>(41)</sup>を實際に行ひ見たく思ふ最中なりしにぞ。岡山其他の友人にも商議の末心竊かに決する処あり。思へらく余か家、北越の名家として祖先以来郷党に重んぜられ、嘗て他人の非難を受けたることなし。これ実に我家の一大名譽とする所にして、設令家運傾くも此名譽は失ふ可らず。如かず負債の大いに嵩まざる内、早く大処分を施し、切めては此名譽を存ぜんにはと、此年の暑中休暇には愈々決心通り改革を行はんと辰田新邨なる家に帰りぬ。

歸りて聞けば、負債の高案外多きく<sup>(42)</sup>驚きぬ。但し一朝夕に起りたる負債にあらざれば、若し余に弥縫の意あらば卒業までズル／＼に附し去り置くこと、敢て難事にもあらざりしかど、こゝに余の心を苦しめたるは、

大人が新渴の或る商家の爲め千円計りの借財に保証し置れたる一口あり。而るに其商家は数年前に破産し、債主は大人を相手に頻りに返済を促し、既に裁判沙汰とも成り居り。熟談もなか／＼届くべき様子なく、去りとて他人の爲め壺千円を弁償するは、此時分余か家に取りて容易ならねば、寧ろこれを機会として、家政を改革し到底資力なきことを債主に示さば、自然熟談の道も開<sup>(43)</sup>くべしと余が正直の心は、遂に此方角に判断を与へたり。余は既に心を決したるには、大人に此事を申出でたるに大人も心を苦め居られたる際なれば、一も二もなく同意を表され改革一切の事汝に任するぞ、何事も相談を要せずと申されたり。依りて余は、覚束なくも、負債の取調をなし計算の末、負債全部を償却し去れば僅かに七、八百円計りの余金を生ずるに過ぎざることを發見せり。余りの心細さに和泉の叔父に相談を遂げたるに、和泉家は当時未だ家産衰へず。且つ余が前途に付て非常の望を囑し居られたれば、切りに改革を勧め給へ、若し生計に事<sup>(44)</sup>



るにぞ。余も初めて力を得、愈々家を畳むで居を東京に移すことに決意し、家屋、田畑等を他人に譲らんとそろく着手したるが、弁償の義務ある千円金も或るもの、内旋によりて僅か計りの金を渡して漸く事済み、家は新発田の旧家老に宅地を合せて譲り渡し、凡そ二ヶ月間計りにて万事片付きたるにぞ。北堂と家弟は、且らく西条へ留め、余は大人と和泉の息を伴ふて愈々上京せり。

此の改革は、余が一身の爲め得策なりしや否やは頗る<sup>(43)</sup>おる疑問なり。余が一身の発達の上より考ふれば、此改革は大いに妨害を与へたるに相違なし。何となれば、此遊学の間早く一家を維持するの責任を担へたればなり。然れども到底一家の困難は、姑息の手段を以つて救済し得べきにあらず。早晚、余の責任として、之を理すること免れざりし以上は、早く之れを処理したるは得策なりしに似たり。何となれば、当時弥縫の策を以つて一時を苟且したらんには必らず、郷党に対して不義理も起るべく、終には見苦しき改革をなすこと免れざりしならんを思へばなり。此の家政改革は、将来の爲めに幾んど産

を剩さるりし。代りに<sup>(43ウ)</sup>他人に対して毫も義理を欠かさりし。又、余も卒業間近なりしにぞ。家を東京に提けたりとて別段怪しむものもなかりし。要するに此改革は、余が身上に取りても非常の不幸なりしは言ふまでもなけれど、僅かに家の名譽を維持し得たるは、早く改革を断行したる功とも云ふべき歟。

大人を伴ひ參らせて上京せる後は、且らく居を番町に構ひ、日々大学へ通学すること、せり。此時分は経済学の研究に深く意を用ひ居りたれば、課業は寧ろ第二段に措き、日々大学備付の書籍室に出入して、専ら経済書を繙き<sup>(44オ)</sup>当時著名の経済書は一応閲読し、学校の講談会にも出席して、常に経済之談論をなしたるにぞ。経済学の熱心家として同年生には勿論上級生にまで知らる、に至れり。扱又、家政向は多くもあらざる余財数ヶ月にして全く尽きたるにより、和泉叔父の厚意にて毎月若干宛の金円を送り越されたれば、一家固より乏を告ぐることはなかりしか、爰に余が一生涯の過失として花柳界に遊ぶまじとの決心は次第に緩み、余裕ある身にもあらぬ

に時には友人に誘はれて北里へ足を入れる、ことも」(44ウ)ありし。勿論最初の頃は敢て無分別にこれをなしたるにあらず、余が志元と学者として世に出てんより実地家として社会に立たんこと本意なりしに、生来の圭角は容易に脱し得ず。事に臨むて或は円滑を欠くの失ありしにぞ。岡山は之れを憂ひ、花柳界ひ遊ぶはよき事ならねど、君の如き性を矯むるには却つて便ならんとて、之れを勧めたるころさへありし。此の勧告は、余容易に容れさりしかど、家政改革の節人を屢々酒樓に会し、或は酒樓に数日宿泊せしこともありて、生来の圭角を去り交際の術を得るには、斯る別天地に起臥するも、実」(45オ)に矯性の一助なりと経験し得たることもありしにぞ。血氣と理窟を相半して、自然入る可らざる所に足を移したるが誤にて、人間の弱点は酒色の為めに最もよく培養せらるゝの古辭に免れず、遂には自ら制すること能はざるまでに至り、之れか為め氣力を害ひたること実に幾許なりしを知らず、勿論學問ある身の此等の事に耽惑するなきは云ふまでもなければ、凡そ二年許の間、全く手脚を一洗す

る能はさりしは誠に恥つべき事なりし。此頃余が花柳の遊びを憂ひ、山一は岡山と色々に相談を遂けたることありし由に」(45ウ)て、当時山一より余の身事につき委曲の書面を岡山へ与へたるを後にて一読したる時は、深く両友の厚意に感し、落涙を禁するに能はさりし。今、左に其全文を掲げて当時の余を自ら描くの労を省き、一には両友の厚意を永く忘れざる紀念となすべし。

(前略) 蚊帳囲内孤灯を挑げて熟考仕候ま、市島子の身上に付、御參考之為申上候。第一身の事は暫らく高閣に束ねて大言すると御認定あれ。

#### 第一 インテレクト

「(46オ)

風流韻事は措之經濟は子の専門、自ら任ずる処。又、哲理論理の如きも十三年十月帰京後は、鋭鋒難当勢にありし。十三年夏中帰郷の節は、実地に際すと雖も讀書に刻苦されたる様子なり。却つて帰京後十四年の春方より花界の遊ありしによつて、大に害をなしたる事と想像す。其節の瑣事は余輩之れを呶々するを屑と

せず。昨夏同伴、商法御講義拜聴罷出候も暫くして別を天涯に惜むに至る。実は昨夏、弟政治法律の事に付、参考を子に与ふる為在京したりしに、却つて其都合に至らざりし。此儀は種々利害」(46ウ)得失のある事に別言はす。実は、政治の理論并行政等法典類実地の記憶等に至りては、弟或は子に勝るやと存じ、昨十月頃常に参考に供候處、冬来種々の方案草稿等には感服の外なかりし。本年一月小野組失敗の傾ありてより子の心頗る弛ひ否な家政上に注意を倍し、三菱以来激職に隙なく、大に読書の妨をなせしは一方に於て事務の実積ありたるに拘らす可惜事と存候。七月演説稿には実に感服の至なりし。於是乎益々歎惜の情を起さしむ。去れば弟か考にては、政治の議論と行政の關係等は」(47オ)子に於て実地、世に立つに充分なりと信す。之れを続緯するの論理も充分ならんと雖、爰に一欠点は本気ならざる在り。

## 第二 イモーション

氏の性質は、本と真面目なりし。然れとも其志す所を

市島春城  
自伝資料『憶起録』解題・翻刻

問へば、之れを吟味すること肝要也。弟思ふに子漢学の教育を受け Chinese interest ありと雖も、其受けたる處は李杜護國の調子にてはあらざりしか、慷慨国事を談する等の事に至りては、或は欠るなからんや、是れ一は教育により一は士族の遺伝なかりしにあらんか(山田實南子等も時」(47ウ)々此弊あらんかと思はる)。

然れば、如何なる「アムビション」抱かれしや。余輩より見れば、之れをヘーステングスのデイルスフォルドなりと云はざるを得ず。嗚呼子重茵煖席の中に生れて小少より之を屑とせず。長じて岱海堂(子の乃祖)の緒を嗣くを以て終身の念となり。錦衣を辞し玉食を去り、慈嚴の柳留を漸くに脱し、熊倉伯父に従て遠く帝都に学に就く。在学七、八年、曉に柴扉を出て、霜に座し、夕に紗窓を籠めて雪に読む。一年三十有余旬孤燈起槩寒生、余が如きものと伍して厭はざるは、何ぞや唯一の市島」(48オ)氏あるのみ。子鑑に此大志を棄て、僅かに花界に投するの人ならんや。然り而して前来看る所にては、或は花界之れか妨をなし、一時の怠

情之れか害をなす。弟仔細に之れを見るに、子花界に在りて必ずしも之れに耽るにあらず。時に dominant なるも固より天性の瀬情にあらず。而して之れあるは如何余輩は之れを決心の鞏固ならざるに帰せざるを得す。

### 第三 ウヰル

子は生平ウヰルを以つて自ら高ふす。子は元來心自ら卑ふす。而して之れを高く位置するは、ウヰル」(48ウ)なり。子は時に十二分の言を吐く。而して之れを保つに汲々とし、敢て怠ることなく所謂十二分を取るの説を実行するは、「ウヰル」なり。弟は子の経済に熱心なるに感したり。子の文章の流暢なるに服したり。子の声望を重んずるに同感を表せり。然れとも初めよりして子のウヰルには余り服せざりしなり。何哉心卑ふすること言高ふすること、又妄りに「ラーブン」なる事、又妄りに断行なることは余輩の素行と反するが故なり。始め子を知悉せざりしときは殆んど之れを忌み(真実の咄なり)己に之れを知了しては大いに惜み」(49オ)たり。然れとも弟は子を以つて素行上の好敵手

となしたり。何となれば子や断するに専にして誤つことありと雖、又果を以つて人を圧することあり。之れを行ふに当りてや、直前敢往疾風の電雷に伴ふか如し。其畢るや則ち雨歇み雲収まり碧後一洗、之れを望めは人をして快と呼はしむ。余、白状す。此反対あるにより、明治九年より十二年まで子と合すること能はざりしなり。十三年の五月刎頸を契りし後も、常に反対の意見を有したり。意の反せるは同せるに勝れり。密かに推ふ、在校の人学士の榮を帯び縉紳」(49ウ)の地に立つ。則ち所謂る鯁公ならざるは殆んど稀なり。此際好友永く磊落の志を万年に保たんは子を措て誰ぞや。余と志を同ふするの士は、多くは余と素行を共にし、而して果に断なるの士は多く余輩と志を異にす。只一の桃浪子あるのみと。子も此意の反せるは了知の事と見、現に面晤の間に相語りたることもありて、弟は歴々之れを記す。子或は学問の暇に跋涉し、或は香粉の陣に馳驅するに当り、他の指摘する所となる多しと雖、曾て之れを以つて子の累となざりし。而して今

や此ウキル或は欠乏の恐れある」(50才) その何ぞや。唯だ家政の累あるに由るのみ。

#### 第四 アクチビチー

庚辰の五月、子遠く関山を辞して郷里に帰り断然たる改革を行ふ。余之れを万世橋畔大泉樓に祖道したり。発するの時、子学事に妨あるを知り越にあるの日又之れを見て、而して忍むて奮然、家政の料理に尽力したり。今日より之れを見れば、或は改革せざるの善きに如かさりしも知らずと雖も、余輩之れを當時に言ふ能はず。何ぞ死兄の齡を数ふる拳を為さんや。當時の拳に於て子は所謂断行の精神を以つて、熱心市島氏の」(50才) 家名を保維するを勉め、此際所志の経済の業を實地に始めて経験す。其所行の成效なる氏の得意知るべきなり。余輩、當時に遡らすして之れを言へば、當時の拳は先つ十全なりしと評せざるを得ず。第四年十月、帰京の上委曲を具さにしたり。子の断行も大いに軌む所あるなり。成效したることならん、所謂経済と云ふ、或は子始めて事に当りて非常に感覺したる者に

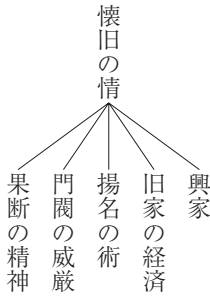
して、當時の余輩にして随分大に過るを咎めたる事ありと雖、兎に角其拳は失敗にあらざりしなり。否、成就したるなり。當時、子は断書して曰く」(51才) 人は一個の所長あれば足れりと。而して子は果断以つて事を処し、信義以つて世に顯はるゝ等を己れの所長としたり。信とに然り而して惜か。翌春よりは或は花界の遊怠惰の風あらんとす。其原因は或は戦勝の余勇によるか、或は資力を持つて出でたるか知る可らずと雖、昨夏以来は余明かに子の家政の爲めに累さるゝを知なり。於是乎子のウキル大に枉曲せらるゝ所となりしやの疑なき能はず。昨夏越にあるの日、色々感覺を起したる中にも実は窃かに却つて北越行の結果は弟、子よりも」(51才) 多を得たりと思ふことなきにあらずたり。春、主権論の時、又結党式に出るや否やの時の如き、弟より之れを見れば、或は我儘に傾きたるの疑なき能はず。而かも多少之を他に顯はしたるは、返すくも遺憾なり。実は往年灑落如氏の桃浪子にはあらざるに似たり。弟又當時頗る激に出て、為に桃浪兄徹宵の勞

を欲したりと聞き、終身の識道と心得居ることなれとも、断然として怒り断然として歇み、霽雨一声前後を分ちたりと。自ら信する所、両兄に対しては万謝も量ならされども」<sup>52</sup>其拳の全体を見る処にては、磊々落たりし自信心あるなり。今春来、桃浪子の余輩に詢る、或は難癖を付るの疑なき能はず。兄は多年子の慣手を承領せらるゝなるべけれども、弟は己れの信せざる所の行に逢ふときは、頗る不快ならざるを得ず。此等唯ウキルの枉屈せしにはあらざるかの疑、一例を設けたるなり。而して此大原因を問へば、余は之れを家政の累に帰せざるを得ず。

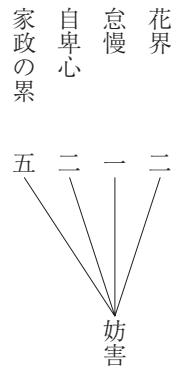
故に

子の長ずる所は

「(52ウ)



子を害したる処は



右の如くなれば、是の家政の累を除くこと緊要」<sup>53</sup>なり。花界怠慢は、一挙手して之れを改むるを得べし。自卑心は他の「インテレクト」の欠乏と共に徐々に之れを改良せざる可らず。

右、昨宵書して二時に至り、今暁四時半より只今に至り不得已閣筆々々。

九月十二日

突々迂叟

梧堂兄

此書状は能くも余が當時を描し出せり。此記を作らんと



て十余年後に之れを取<sup>(マツ)</sup>出<sup>(マツ)</sup>てで熟々考ふれば、実に家政の累と突々が所謂る自卑心とは後來に至るも大いに害をなした<sup>(53)</sup>。ゝるに相違なし。余は家累の爲めに、磊落の氣を失へり。家累の爲めに學業を成就する能はざりし。又、自卑心の爲めに己れの地位を充分利用する能はざりし。今にして思へば、突々ほと余が心事をよく穿ちたるものは、友人中未だこれあるを見ざるなり。

余が大学文科三年級を卒んとする頃は、稍々世故に通じ、熊倉翁が会社を目論見、或は営利事業を企てんとする時には、余を招て意見を叩き、余も進むで種々の方案を画し翁より充分の信を得るに至れり。斯く座上の水練<sup>(54)</sup>。ゝなから、世事に立さはりてはナカ<sup>(55)</sup>に面白く學業によりて窮屈なる課程を履むは追々もどかしく成り行き、果ては怠慢も生じ学校の方は自然欠席勝となれり。一日家に在りて慨然として思へらく、人皆な学士の称号を看板として世に出でんとす。其人設令世に用られ志を得るも、これ其人の力によるにあらずして、寧ろ学士の虚名これを然らしむるものなり。余は学士の看板に依頼し志

を行ふの陋を為す可らず。況んや余が志、学者となるにあらずして、寧ろ実地家とならんと欲するに、整<sup>(54)</sup>へ学士と云ふが如き迂闊の看板を掲げるは、却つて事に臨むて害あらん。既に世に立つに充分なる教育を得たる以上は、最早大学に留まるの要なし。一日も早く実地界に身を投ずれば一日丈早く志を達するの理なり。若かず虚名を抛つて早く実に執かんにはと既に窃かに此心を決したるも輕忽之れを口に発せず、靜かに時機を待ち居りたりしに、爰に余が決心を実行するの機会到来せり。

此頃、大隈重信氏の信任を得て、政治海にも<sup>(55)</sup>。學者界にも評判よき二人の政治家ありたり。其人の名声は共存同衆と共に喧しく同衆の雑誌をみるときは、先づ此人の論文を読むこと例なりしが、遂には敬慕の情を生じ、折もあらば相会して議論を上下したく思ひ居たり。而るに高田の友人に小川為次郎と云ふ人あり。これも當時官途に在りて、小官ながら學問に志篤く政治上にも考を有したる人物なりしが、高田の紹介によりて何時この交を結び、追々は虚日なく往来するの間柄となりしか、此人

余か敬慕するの人と交ありて」<sup>(55ウ)</sup> 其紹介により、高田と共に深き交を結ぶに至れり。此人余人にあらず、小野梓氏則ちこれなり。

余が小野氏に接したるは、国会開設の大詔降るの前一年にして、政機將に動かんとするの時なりし。小野氏は深く学問を好み政理に通じ幾んど議論を食物とする程の人なりしに、小川が大学出身の余等を紹介したるを喜び、初めより懷を虚ふして交り、余等を遇するに朋友の礼を以つてしたれば、余等も又深く氏の官吏臭味なきに感じ、益々敬慕の情を深ふせり。余等が未だ氏に交はらざる前、小川は一日氏」<sup>(56オ)</sup> と外国政党の事を談し、日本にも純正なる政党の樹立なす可らずと論するや、氏もこれに同感を表し、遂に氏より大隈に説かんとするに至りたるは、恰かも余等が氏に面接するの前後なりし。余等は、当時自由党の運動を傍觀し其の弊に倦み居たれば、新政黨樹立の事には最も同感を表し、斃れて已むの決心を以つて小野氏に接する毎には、大いに慇懃し其組織の方案等に就ても互いに協議を凝らしたりけるが、終には日を

定」<sup>(56ウ)</sup> めて相会すること、なり。議論愈々進むては輒々相談相手を多くするの必要も起り、後には岡山、山田の兩人を加ふること、なり。踵て砂川（雄峻）、磯部（醇）其他二、三の友人をも伴ふて出席すること、なれり。當時在官人が、此種の経画をなすは政府の頗る忌む所なるのみならず、官立学校の学生が政治上の計画をなすも之れを以つて創始となせば、彼れ是れ事の外に漏れんことを憚り、小野氏を橋場の莊に訪ふときも外見をかたりて、可成別々に行くことを約し、隊をなして訪問することは慎むて避けたれば、凡そ三、四ヶ月の間は、大学同窓のもの」<sup>(57オ)</sup> も知るもの絶てなかりし。此際の下下の形勢を詳説するは後跋に譲り、約言すれば開拓使事件將さに起り、大隈は明治十七年を期し国会開設の建議をなしたる時期なれば、政機の切迫せるは言ふまでもなし。去れば大隈も小野を通して余等の意見を容れ、略々政黨樹立の志を決し居たれば、小野は一日余等を雉子橋邸に伴ふて大隈に紹介したり。之れも極めて秘密を主としたるに、会食の際図らずも河野敏謙氏訪問し来り。不

審の顔色をなして余等を一瞥したる時は、余等も秘密は既に破れたりと覚悟せり。又、此頃小野と共に討論したるは」<sup>(57ウ)</sup> 新政党の主義綱領等にして、流石学者の寄合なれば学理上より基礎を定むるにあらずんば、主義綱領膚浅を免れずとて、当時余等が大学教授フネロサに就て聴きたる政理論を土台とし、幾回か討論の末種々の修正を加へ、終に天下の大政党たる改進黨の綱領こ、に一決したるも亦意外と云はざる可らず。

これより先き（小野に交はらざる少しく前と覚ふ）余等（岡山、山田及余）は言論の不自由を感じ、元老院に向つて学生及官吏に政談演説を許さんことを建議するの志あり。三人熟議の末、愈々之れを」<sup>(58オ)</sup> 決し事項によりて三人各々担当を定めて執筆する事を約し、終に数日を経て一篇長文の建白書を作り十四年十一月を以つて之れを元老院に呈するに至れり。此建白は余等が熱血の灑く所にして、議論字句共に苟もせず。或は世上に流布する機会ありとも識者に非難を容れしめざるまでに鄭重を加へ論旨章句の叩敵には、三人議論を戦はして天明に及

びたることもあり。又、深夜の燈なき大学の講室に議論して校監に疑はれたることもありし。当時大学生にして政治上の建白をなしたる例は実に空前」<sup>(58ウ)</sup> なれば或は校長の忌諱に触れ退校を命ぜらるゝことなきにも限られれば、元老院に呈出するまでは、固く秘して同輩にも知らさず。又、予じめ退校を命ぜらるゝ覚悟をなして此事を企てたり。去れば此建白提出の後は、殊に印刷に付して先づ第一に加藤総理に贈り、如何なる処置に出るやを試みたるに、総理の無言に付し去りたるは案外なりし。扱、斯る建白を僅か一回なせりとて、固より採納を得べきにあらざれば、其写を知人及各新聞に寄せて大いに与論を惹起さんことを図れり。大学生が建」<sup>(59オ)</sup> 白を為すこと珍らしきのみならず、議論も頗る緻密に涉りたる一篇の大論文なりしを以つて、各新聞共に之れを称賛し、中には建白の全文を掲載して新聞条例に問われ処刑を受けたる向きもありしが、当時勢力ありて東京日々新聞の主筆福地源一郎独り不同意なる由を耳にしたれば、余等三人は関直彦を介して、日報社樓上に福地に面し、一場

の議論を試み数時間に渉るも終に決せずして別れたるこ  
とありし。

叙事前節に戻り、当時の時勢を案すれば開」(59ウ) 拓使  
事件愈々囂しく、末其落着を見ざるに、天皇御巡幸の事  
ありて、大隈又供奉の中に加はり京地に在らず。此際は  
政機将さに一転せんとするの時にして、小野氏の苦心名  
状す可らざるものあり。当時小野氏が密使を馳せて大隈  
を逐ひ密かに策を献したる秘書あり。当時の事情を知る  
に便なるを以つて左に掲ぐ。

#### 若我自当

今ノ時ニ当テ若シ我自カラ其局ニ当リ此際ニ処スルアラ  
バ、如何カ其方策ヲ施シテ此難事ヲ済ス乎。宜シク退テ  
之ヲ講窮ス可シ」(60オ)

抑、明治十四年ノ今日ハ、如何ナル時ゾ。是レ豈政治変  
遷ノ時ニ非スヤ。昨内閣ノ分離ヲ行フテ以来、政治ノ歩  
武愈々艱難ニ赴キ、吾人ヲシテ明カニ其変遷ノ期近キヲ  
知ラシメタリ。然リト雖、社会ノ現象未タ曾テ其極ニ至

ラス。猶ホ或ハ後日ニ待ツコトアルカ如クナレバ、吾人  
竊カニ其瑞緒ヲ明治十五年ノ後ニ見ンコトヲ期シ、未タ  
曾テ直ニ今日ヲ以テ其秋ナリト思惟セサリシナリ。

是ヲ以テ朝野ノ人共ニ其変遷ノ機ニ応スルノ予備なり。  
在廷某々ノ輩ハ、無謀ニモ今時ノ有様ヲ継続シテ一時ノ  
小安ヲ苟媮セン事ヲ冀ヒ」(60ウ)

以下白紙11丁

72丁より

大隈の供奉中政府は如何なる廟議を遂けたるか。此間の  
曲折は余之れを知らずと雖とも、還幸後、突然国会開設  
の大詔煥発となり、大隈の策こゝに破れて其の一派は皆  
な冠を掛けて野に下れり。於是政党樹立の事一段の気焰  
を添へ大隈も愈々政党組織の決心をなしたれば、余等は  
漸やく其の望の達したるを喜び、これよりは小野との往  
復は一層繁劇を加ふるに至りたり。然れとも大学に在る  
身は公然政党組織に与り難く、去りとて時機既に切迫し

たれば、此際大いに力を用ゆるにあらざれば他日必らず人後に落ちん、於余か」(72オ) ねての決心を行ふべき時節愈々到来し、余は窃かに思へらく、大隈、小野の帷幕に参して大政党の組織に従事するは一快事なるのみならず、余が起身の端緒も恐らくこれより開けん。学位を抛つが如きは敢て意とするに足らざるなり。且つ此際大学を辞して全力をこれに委ぬるは、諸友をして安んじて業を卒らしむるの便ありと初めて決心を岡山、山田に語る。両友之れを可とす。即ち一篇の進退を筆して熊倉翁并ひに恩人和泉叔」(72ウ) 父に寄す。皆な異議なし。於是卒業前一年、終に大学を去る。

これより先き家大人病あり。久しき経るも愈へず。思へらく熱間の地衛生に不可なりと(時に余が家、神保町に在り) 居を橋場に移す。新居は墨江に臨むて風光佳絶。大人の病を養ふに適するのみならず、小野氏の家又近く、数町の内に在るを以つて頗る往復の便を得たり。居ること数月、大人の病益々甚し。偶々家弟大阪より来る。相談して大人を和泉橋病院へ入れ参らせ橋本国手(網常)

執刀にて患部を切開すること、はなれ」(73オ) り。患所は腹部に在りて双手を合せたる程の塊物なりしが、頗る稀有の異症と見へ、ベルツ大学教授すら診定する能はず殆んと治療に窮したるを橋本国手の之れを全治に至らしめたるは実に氏の巧術に帰して可なり。橋本自身も之れを手柄と思へたりと見へ、当時処々人に遇ふて此症を語り出でたりと聞けり。兎に角斯ばかりの難症の全治に至れるは賀すべきの至にこそ。

扱て又政党組織の一事は、大隈掛冠後直ちにも発」(73ウ) 表さるべき氣勢なりしが、茲に一頓挫を生じたるは、退朝の同志中追々変心するものあり。一時は人心に信を措き難き景況となりしこと是れなり。既に叙たる如く大隈の掛冠につれ縁故あるものは相競ふて冠を掛けたるも、其実一時の行掛り上已むを得ず進退を共にせるものも少からず。此等の儕輩は当初より久しく野に在るの決心あるにあらざれば、一旦政党組織に同意を表したれと、糊口に窮しては再び仕官の念も起り、扱てこそ追々動揺し初めたるなり。余等同志は、窃かに此事情を知り、数々

小野」(74オ)に迫り、依違逡巡機会を失するの不可なるを説きたれども、内部の事情ナカ／＼決行を許さざるものありしと見へ、小野も余等の意見を可としながら其実は躊躇し、恰かも板挟の姿にて一時は病に托し、余等に面会謝絶したることもありし。余等同志は、心矢竹にはやれども亦奈何ともする能はず。快々の間に早くも三ヶ月は過ぎむ。余の失望又以つて察すべきなり。

此頃、小川は官を罷めて三菱会社の社員となりたり。一夜余を訪ふて曰く。政党組織の事今日の形勢」(74ウ)より推せば容易に行はるべしと思わず。而して君既に大学を辞したる以上は空しく日を送るは本意にあらざるべし。幸ひに三菱会社は能く学者を款待し、有為の人物をして其の驥足を伸はさしむ。君これに入るの意なきや、若し果して意あらば、余は君の爲めに入社の協議を遂げんと深切に勧められたるにぞ。余も当時無事に苦しむの際、殊に三菱と云へば余が熱心に学びたる経済之学問を實地に応用するに不足なしと心に決し、紹介を頼む旨を申したるに、其後数」(75オ)日を経て協議略々調へたれば、

兎に角浅田正文に引会すべしと初めて某酒樓に浅田に面会せり。浅田は当時三菱本社の会計部長にて、余は其の部下の運賃に関する一課を受持こととなり、愈々月給四十円の辞令を得て入社したるは□月□日(75キマデ)なりし。三菱の内規にては、初より高給の人を取らず。薄給より技倆に応じて漸く進むるを例とし、余の俸額も多きにはあらねど、同社の慣例よりすれば先づ優待したる方なりと旧社員は語れり。余が始めて浅田に誘はれて会社員に引会されたる際、部長室に濃髯の東北なまりの人あり。余は其の」(75ウ)容貌に見覚えあれど其姓名を思ひ出る能はず。窃かに小川に問へば二橋元長なりと云ふ。此人余が髭鬚の頃新潟県の与事として新潟学校へ来り。市島一家の子弟を殊に面前に延て、彼是教訓ヶ間敷事を云へたる縁故もあれば、余は姓を告げて一揖したるに彼れは横柄に礼を返したり。後にて聞けば此人も官員風の脱けさるの病にて、此時余の経歴も知らざりしま、斯くは無礼の挨拶をなしたるならんと云ふ。実に去ること、思、二度目に会したる時は頗る愛嬌ありて、互ひに髭角挨拶をなした

り。当時二橋は」(76オ) 調役の長にて余の課とは直接に類々たる交渉あり。余を子供の如く思ひ居たる二橋も交渉の動もすれば余より遣り込めらるゝこともありしにぞ。挨拶の変したるも敢て怪むるに足らざる也。余は当時此一事に依りて役所と云ふものも恐らく此類のものならんと想像し、官吏となるは飽までイヤなりと観念したり。入社の際尚一事の余を驚したるは、社僕「若旦那よりお召」と申来れることなり。余は若旦那とは誰れの事と傍らに座せる人に問へば、低声に副社長の事なりと答へたり。岩崎一家の会社に副社長を若旦那と呼は其筈なり。余の之れを解し」(76ウ) 得さりしは、おぞましかりきと自ら笑ひたるも、若旦那の三字は長く耳底に遣りて忘れられぬ感あるは何故ぞ。解し難れど、兎に角今にも此の三字の一撃疑ひなく三菱会社を解するの鍵<sup>キ</sup>となりたるに相違なし。何んとなれば其後会社の組織の甚案外なるを知りたれど、別に奇異の思をなさざりしを以てなり。余の配下に五名計の簿記手ありて、日出より日没に至るまで計算に忙はしく、殊に外人局と直接の交渉もありし

にぞ。尽日新聞を見るの忙もなく、二、三ヶ月の間は目を回す程の多忙に日を送れり、すべて此社に入るものは」(77オ) 会社を以つて天地となし、又之を以つて生涯とすることなれば、朝は出勤の早きを競て、日の未た上らざるに出勤するものあり。退散は可成遅きを誇りて、或は燈を点するも尚ほ業務に営々たるものあり。一週に一回酒飲機会あれど、其の仲間は皆な日夕相見るの社員にして他人を交えず。今日は社長の招き、明日は部長の宴会と楽しむことも少からざれば、日曜を休まずとて不平もなく、病ありとて出勤せざれば誰れ咎むるにあらねど、同僚に面目なさに忍むで出て、精勤す。実に此会社は役所に似て役所の惰風なく、人をして知らず識らず己れの家に在るか如き思あらしめ、精一杯の」(77ウ) 勤勉をなさしむるは、流石に他人企たて及ばざる岩崎長者技倆の存する所。余もほと／＼感じ入りたり。余は薄給ながら特別に奏任の待遇を受け居たれば、会社に対し固より一点の不満足あるべき筈なし。唯た入社の際、政界の事を断念したるにあらざりければ、折に触れ



ては其色氣外にあらわれ、或時は副社長に招かれ他日満  
足を得べき時もあるべきにより忍むて社務に従事せよ、  
政治上の事は且らく思ひ止まるべしと諭されたることも  
ありし。当時三菱と改進黨とは深く関係あるか如く世上  
に持囃され、三菱は為めに非常の迷惑を蒙りたるに、社  
員」<sup>78</sup>に斯る諭示をなしたるも敢て無理ならねと、  
焚か如き血氣を此諭告を以つて抑ゆるは、ナカ／＼余の  
当時為し能はさりし処なり。且つ一時沈鬱せる改進黨樹  
立の計画も漸やく一陽來復の期を得てければ、之を外に  
見て会社に潜み居らんも心苦しく、一時は進退に当惑せ  
しが、遂に心を決し小川、岡山、山田の諸友に退社の決  
心を明かすことゝはなれり。当時副社長并に浅田共外に  
出て、社にあらさりしにぞ。退社を決するには極めて間  
合悪かりけれど（以下白紙）